
*結

「呂望は、われわれとはちがって、夢をみない男です。めざめつづけている男がなした偉業を、夢みる者たちは、奇蹟とよぶ。呂望は夢のむこう側かこちら側にしかない」

——宮城谷昌光作 「太公望」中 疾走の時 356頁より

少年はウルル中央図書館の門を潜った。

その背には神御衣カムミツである純白の外套を羽織り、その右手には藜あかさを模した精霊結晶の杖を握り、大またで歩き続けている。

少年——アルアイリム・アラート・フヤド《白衣の賢者》アルIIイクシル・ディアウスは露骨に昂ぶっていた。

自然と足が大股になっていた。図書館への移動や閲覧の申請で、実際にその論文のところに行くまで、一晩も間を置くことになってしまった。そして、それが逆に昂ぶりを増加させた要因となっているのだろう。あるいは昨夜ほとんど寝ていないことも一因かもしれない。一応、寝ようとはしたのだが、着想の拡大が睡眠欲を悉く吹き飛ばし、結局、徹夜で論文執筆の下準備に費やしてしまったのである。

——歳を重ねるということは、自らに宿っていた数多の可能性を磨り減らしていくことであり、残っている可能性を磨き輝かせることだ。

近頃、父母から、自身の小さい頃の話や聞く度にそんなことをディアウスは思う。

自分は何多のものを失い、しかし、善かれ悪しかれ、いくつかのものを手に入れた。

それは、他者に比べれば慎ましい動きしかできないとはいえ、一応は伸びた手足であり、その多くが塵芥なのだろうが、それでも色々と詰まっているであろう頭である。

アルIIイクシルは幼子の無垢を肯定する気はない。無垢の肯定は無知の肯定と同義だからだ。あえて父の信じる宗教の言葉を借りれば、エヴァは知恵の実に誘うべきだったし、アダムは知恵の実を喰らうべきだった。おそらく、この点においては鵬翦と同じ意見だろう。そして、幼子の可能性の大きさを否定する気もない。幼子の無邪気さはその可能性の一つのどといわれれば、肯ずるだろう。

だが、自分はその自らの可能性を悉く潰してきた。あの幼馴染の鵬翦は既に二進法や、複素数平面、二項定理、挙句の果てに微分方程式と、彼女自身の可能性——その原石を光輝く珠玉と成している。それも、わずか十六と言う若さで！ところが、同い年の鵬翦がそれだけ

の事を成している一方で、同じように十六年の歳月を生きてきたアル||イクシルは何一つ事を成してはいない。己の可能性をただひたすらに溝ぼみに捨ててきたと言える。

しかし、自分にもたった一つだけ未だ残っていて、しかも、歪に膨れ上がったものがある。

それは自らを尊ぶ心——すなわち自尊心、誇りだ。

実力とも実績とも不均衡きわまる肥大化した自尊心だけが、あの幼き日から変わらず輝いている。

「そもそも、鵬翦の微分方程式はきわめて難解なものだ。はっきり言って、訳のわからん記号が並んでいるようにしか見えない」

登録探究士のみが出入りを許されるウルル専属図書館の中、アル||イクシルはぶつぶつと呟いていた。

「勿論、それは当然のことだ」

何故なら、鵬翦が微分を理解、使用するためだけに作った記号が並んでいるのだから。記号化とは一般化を容易にするための手段である。しかし、往々にして、一般化とは抽象化である。そして、微分という高度概念においては、極度の抽象化が必要となり、その概念から、具体性が失われてしまう。本来、理解の助けである記号も、そこから、具体性が失われた時には、それ自体が難解なものとなってしまふ。無論、これは微分だけではなく、零や負数であっても同じことなのだが、微分方程式においてはその傾向が顕著である。

「しかし、僕はそれを一目見ても、わからなかった。僕はそれをいくら考えても、悟れなかった。……他の連中はすぐにその意味を解していたがな」

それをアル||イクシルは己の力不足ゆえだと考えていた時期もあった。

だが、それは誤りだった。正しいのは自分であり、間違っているのは他者だったのだ。

己をただひたすらに信用し、他をやたらと懷疑する姿勢。

それを驕りというものもいるだろう。しかし、それはやはり誇りなのだ。

「そう、僕に解せなかったことを軽視してはならない。僕は知性ある存在だ。その僕が解せなかったのだから。無論、一般例ではなく、具体例を示されれば、流石にわかったが、それは後驗ア・ポステリオリ的だ。論理ロ・ゴスとは先驗ア・プリオリであらねばならない。すなわち、鵬翦の微分は未だ完全な論理ロ・ゴスではないのだ」

その一点が $\frac{dv}{dx} \times \frac{du}{dx}$ というでたらめ式だ。

$$\frac{d(uv)}{dx}$$

そのことに対して、アル||イクシルは誇りだけではなく、恥も覚えていることを否定はし

ない。そもそも、アルⅡイクシルが $\frac{d(uv)}{dx} = \frac{dv}{dx} \times \frac{du}{dx}$ を怪しんだのは、実のところ、 $\frac{d(uv)}{dx}$ や $\frac{dv}{dx} \times \frac{du}{dx}$ の指す意味がよくわからなかったからだ。周囲の人間が（自分は哀れな凡愚に過ぎないのだと口にし

たあのアルⅡカマルですら！）瞬く間に $\frac{d(uv)}{dx}$ や $\frac{dv}{dx} + \frac{du}{dx}$ を理解し、その意味に驚愕していた時、

アルⅡイクシルは一人脳裏で『無限に小さくなる？それはどういう意味だ？』と悩んでいた。仕方がないので、実際に公式の代数に単純な自然数を入れて初めて『なるほど、成立する。ならば、他の公式も正しいのか？』と驚いた。そして、他の探究士仲間にも一日遅れてから、『人類は……ついに、ついに、未来の定量予測に第一歩を踏み出したのか……！』と戦慄したのだった。そのことは未だに秘密である。周りが鵬翦のもたらした巨大な知的財産に驚いている中、アルⅡイクシルが一人だけ『ごめん。僕、意味がわからないんです』とは言えない。そんな恥ずかしいこと言えるわけがない。それは同じウルルの探究士でありながら、アルⅡイクシルだけが他の者より、一歩も二歩も劣っていることを大声で標榜することに他ならないからだ。

——たとえ、実際にその通りであったとしても。

アルⅡカマルは己をアルⅡイクシルと同じく鵬翦の如き天才に踏み付けられるだけの凡愚であると評した。だが、それは違う。少なくとも、アルⅡイクシルは違うと信じている。上述の例を見れば明らかではないか。アルⅡイクシルから見れば、アルⅡカマルもまた鵬翦と同じ、天才の類であり、真の凡愚であるアルⅡイクシルを踏み付ける者なのだ。アルⅡカマルが瞬時に鵬翦の微分方程式を瞬時に解した隣で、その意味を解せず懊悩し、自分と友人の数学的才覚の差に苦悩していたのだ。あの時、アルⅡカマルの存在がどれだけ、アルⅡイクシルの自尊心を踏みにじったことか。その辛さをアルⅡカマルはまるでわかっていない。自覚がない分、鵬翦よりもたちが悪いではないか。その癖、自分は負け犬だと？凡愚だと？ふざけるな。泣き言を言うだけなら、その才を万分の一でいいから、自分に寄越せと言うのだ！

ふと、アルⅡイクシルは自らの眼が湿っていることに気付いた。

慌てて、アルⅡイクシルは自らの白衣でそれを拭う。そして……。

「これは憤りだ。昂ぶり故に涙腺が刺激されただけだ。断じて、悔しさではないっ！」

思わず、アルⅡイクシルがそう叫ぶと、周囲の探究士がざわめいた。知り合いの探究士が心配して、自分に声をかけてくる。だが、アルⅡイクシルは厳然とそれを無視した。

——こいつらもアルⅡカマルと同じだ。

その想いがこの白衣の少年を動かしていた。そう、アルⅡカマルだけではない。アルⅡカマルに追従（そうだ。彼らは皆、アルⅡカマルに追従していたのだ！）していたアルⅡイクシルの知人——この時、彼らを友人と呼ぶ気にはなれなかった——も、また、所詮は同じ穴の貉だ。

数学的才覚に大きな欠落があるアルⅡイクシルはそれ故に微分方程式の一般例に片っ端から、単純な自然数を代入していった。そうでもしなければ、アルⅡイクシルに微分の理解など不可能だったからだ。そして、その過程で、それ故にこそ、アルⅡイクシルは前述の $\frac{d(uv)}{dx}$

と $\frac{du}{dx}$ の間の差異に気づいた。

さらにこの差異に着目し、 $\frac{d(uv)}{dx}$ や $\frac{du}{dx}$ 、 $\frac{dv}{dx}$ に単純な自然数を代入し続けたアルⅡイクシ

ルは $\frac{d(uv)}{dx}$ が $\frac{du}{dx}$ ではなく、むしろ、 $u \frac{dv}{dx} + v \frac{du}{dx}$ と等しくなるのではと勘繰り始める。

勿論、これは演繹の結果ではなく、不完全な——非数学的な帰納の結果である。要するに経験則。小さな村の『夕焼けが綺麗だと翌日は晴れる』などの言い伝えと同じ次元で『何故、そうなるか、因果関係はよくわからないが、そうなることが多い』というのと同じ程度の法則だ。勿論、現在ではこれは『気流の関係で天気は西から変わってくるから』だとわかっているが……。

だが、しかし、哲学においては因果が明確でないものは理論とは認められない。当たり前だ。理論とは先験的ア prioriな論理ロジクス——すなわち、必ず成立する一般法則のことを指す。たとえ、『夕焼けが綺麗だと翌日は晴れる』ことが百回続いたとしても、百一回目には雨が降るかもしれない。一万回続いても、一万一回目で雨になるかもしれない。それでは『必ず成立する一般法則』とはいえない。よって、経験則をはじめとする帰納的法則は（すべての可能性を想定する数学的、完全帰納法を除いて）原則的に理論とは認められないのだ。

そして、数学においては、特にこの傾向が顕著だ。例えば、生物学における法則とは、認知されている生物についてのみ成り立てばよい。珪素を中心にして成り立っているかもしれない、異星の生物の法則については（少なくとも現段階では）考えずともよい。物理学ならば、この宇宙のことだけを考えればよい。例えば、物が落ちる時の運動の法則については、時間軸が一本で、重力が引力であるこの宇宙で成り立てばよい。しかし、数学では時間軸が三本で、重力が斥力である宇宙についても、考えねばならない。それだけ、数学というものは想定せねばならない状況が多いのだ。

だから、先に述べた原則がきわめて、強力なものとして、蔓延っている。

$$\frac{d(uv)}{dx} = u \frac{dv}{dx} + v \frac{du}{dx}$$

アルIIイクシルが一億回自然数を代入し、その成立が正しいことを力説しても、それは《証明》にはならないのだ（逆にいえば、非数学分野においては一億回くらい正しければ、因果関係が明白でなくとも、《証明》に似た扱いを受ける）。

しかし——『夕焼けがきれいだと翌日は晴れる』という帰納的法則の理由をずっと考えていけば、『気流の関係で天気は西から変わってくるから』という演繹的法則にたどり着く。

同じようにアルIIイクシルはこれらの鵬翦の誤謬の理由を薄々感づき始めており、先のミソプの論文を読み尽くせば、おそらく、その誤謬の指摘と解決への一步を踏み出せるはずだ。

そう、曖昧模糊とした形ではあるものの、アルIIイクシルにはその誤謬の原因が見えかけていた。

つまり《収束》《極限》《連続》などの概念の定義だ（ちなみにこの頃、まだ超実数など誰の頭にも存在していない）。

「ここが欠けているから、僕はわからなかった。つまり、鵬翦の微分は不完全なのだ」

この部分において、鵬翦はいくつかの論理飛躍をしている。とはいえ、ウルルでは大多数がそれを指摘しない（勿論、『0で割る?』といった指摘される部分もあるが）。何故か？それが自明だからだ。ウルルにおいて数学をかじる者はそれだけで世界有数の数学研究者だ。言語化するまでもなく、ほとんど、感覚的に理解しているのだろう。

そして、この感覚的な理解というのが厄介なのだ。

天才性という点で、おそらく、鵬翦はミソプよりも下だろう。

先程、微分においては記号すら難しいといったが、それでも、記号は理解の助けであることと変わらない。限定的とはいえ、アルIIイクシルが微分を理解できるのは鵬翦の発明してくれた微分記号dや積分記号∫のおかげだ。これがなければ、アルIIイクシルには微分など、ちんぷんかんぷんだろう。いや、アルIIイクシルだけではない。発明者の鵬翦を含んだ一流の探求者の面々も微分を理解するなど不可能だろう。そして、だからこそ、鵬翦は記号を発明した。彼女にとって、微分や積分の理解のためには記号が必要だったのだ。

しかし、一人、こういった記号を必要とせず微分に理解できるであろう男がいる。それが

アルIIシャイター・カパー・アズワド

が《黒衣の魔女》鵬翦とは独立して、微分を発見していた《ウルルの長》ミソプ

シャイフ・アルIIウルル

ラマだ。彼の微分には記号はない。一応、曲率法という記号的概念はあるが……はつきり言って、これはアルIIイクシルの手に負えない。それ程、難解な手法だ。しかも、その位、や

やこしいくせにできることといったら、鵬翦の微分記号dと大差がない。前述の通り、ミンガラムよりも鵬翦の微分が普及したのも無理はないのである。しかし、逆に言えば、ミンガラムにはそんなやこしい（つまりは不完全な）記号でも、十分に微分を理解できたということだ。おそらく記号などなくとも、彼には感覚的に微分が理解できたのだろう。これは凄まじい話だ。鵬翦もいわゆる『天才』の類であることに間違いはないが、ミンガラムは確実にその上を行く。記号化を為さずに純粹概念のみで、微分を理解するなど、化け物といっても過言ではない。

しかし、理解不能な天才とは狂人と同じである。記号化を為さなかったために、その理解は彼のみのものであった。先に述べた如く論文にならず、世界に現れることはなかったのだ。また、文章化、言語化を忌んだために、その微分の具体例における理解はともかく、一般例における理解を為せなかったともいえる。そもそも、微分が積分の逆演算であること——すなわち微分の持つ数学的、物理的、幾何学的重要性とそれそのものの定義——に気付いたのはミンガラムではなく、鵬翦なのだ。

「ミンガラムは鵬翦よりも天賦に恵まれていたから故にこそ、彼女に遅れを取ったといえる。そして、これは逆も成り立つ。成り立つはずだ。このアルイクシルがその逆を成し遂げさせてみせる……！」

そうだ。ウルルに在るものは大なり小なり天才ばかりだ。それこそ、多少の論理飛躍など、感覚的な理解により、見逃してしまうほどの天才ばかりだ。だからだ。だからこそ、この誤謬を正すことが出来ない。

しかし、ここに例外がある。

最も才能に乏しいもの。数学的才覚にも、膂力や容姿にも、精霊を操る力にも恵まれなかった者。およそ、人間が具えるであろう、ありとあらゆる美点から悉く見放されている男。言うなれば、世界に愛されなかった男。

そして、そうでありながら、あまりにも肥大化している誇りゆえに己の可能性を捨てきれずにいた男。そして、高すぎる気位ゆえに、微分の理解への苦勞を、己の才覚の不足ではなく、現行の理論の欠陥であると、責任を擦り付けてしまった男。言うなれば、自分の無能を認め切れなかった男。

だから、だからこそ、この微分の誤謬に気付き、その部分を補う数学史上の一大発見を成せる男——その名は《白衣アルアイリム・ムラト・アフラトの賢者》アルイクシル・ディアウス。

「鵬翦よ、貴様が鳳雛ならば、僕はそれに抗う臥龍となろうっ！」

思わず、天に向かい叫んだ。

そして、突然何かを思い出したように立ち止まり、クククツとまるで《白衣の賢者》は嘲った。あたかも《黒衣の魔女》の如く。それは彼の脳裏に……。

『たとえば、私の故郷では、とある天照らす日輪の女神を祀っているの。最高神としてね』

……という幼き日の阿翦の言葉が蘇ったからである。東方において、日輪には三本足の鳥が棲むといわれているらしい。

少し強引だが、その鳥のことを鳳凰、あるいはその娘子たる鳳雛と捉えることは出来なくもない。そして、鵬翦の氏字たる鵬雛子は鳳雛の意でもある。

——ならば、鵬雛はまさに太陽の化身、その天照らす女神だ。

少年はそんな諧謔に耽った。

先にも述べたが、アル||イクシルが育った乾燥地帯において、太陽とは強すぎる日差しを具え、ただそこにあるだけで、万物を消耗させる荒ぶる存在である。逆に月はそのほのかな光によって、太陽の強すぎる日差しの苦しみを和らげてくれる、優しい存在である。

考えてみれば、アル||カマルはまさしく《月》カマルだった。

だが、アル||イクシルは《月》カマルではなく、《日》シヤムスを求めなくてはならない。

ただ、優しいだけの月明かりの下では何も生まれはしない。

だから、アル||イクシルは辛くとも、苦しくとも、傷付けられようとも、日の光を求めなければいけない。

ギラギラと照りつけ、側にいるだけで心身を消耗されられる太陽を。だが、それ故にこそ草木を育み、獣を食ませ、人を立たせるあの《黒き太陽》シヤムス・アル||アズワドの巫女、鵬雛をこそ、自分は今までも追いかけるべきだったのだ。

「ははは、我ながら、凄まじい執着だな、ただの友愛とはいえない」

思わずアル||イクシルの口から、自嘲の言葉が迸る。

「ならば、この拘泥……そうか、これが愛欲というものか」

いや、多分、自分はその日、初めて少女とであったあの時、もう既に彼女に魅せられていたのだ。

「ああ、ならば、これが初恋か！」

図書館の中を随分と歩いたアル||イクシルは第三種閲覧制限文書の扉の前に来た。

門番である二人の兵士が槍を交差させ、その扉を塞ぐ。

ここまではウルルの探究士ならば誰もが入れる領域であった。そのため、最下級とはいえ、その証たる神御衣を羽織っているアル||イクシルは声をかけられることもなかった。しかし、ここから先は同じウルルの探究士であっても、アル||カトライト・アヤド《白衣》階位の様な下級探究士は通行禁止である。したがって、アル||イクシルもここから先へ足を踏み入れることは原則許されない。だが、それはあくまでも原則である。

アル||イクシルは師匠に言われた通り、己の背丈を越える長さの奇妙な精霊結晶の杖《カムヌ》を彼らの前に示した。

すると、二人はその藜を模した杖と、アルルクシルの《純白の外套》アルルクシル・アンヤドをじろじろと見比べた。彼らは奇妙な顔をしたが、最終的には槍の交差を解き、アルルクシルに礼を取った。だが、アルルクシルは彼らに返礼すらせずに、昨日まで禁断とされていた知識の扉を開く。

探士ならば、誰もが食指をそえられる書籍が山積みになっている中、アルルクシルは目的の文章——ナジュマツト・スプフの論文の下へと急いだ。

他人の論文を引き写すと言う行為に、アルルクシルは後ろめたいもの覚えた一時期があった。だが、既に迷いは打ち消されている。

天才が創造するならば、凡愚は模倣すればよいのだ。

いや、あの文句なしの天才であるミンガラマとて、完全なる無からの創造などしたことはない。例えば、万有引力の法則とて、かつての大占星術師ヨアンネスが二十余年の超人的計算によって残した惑星運動の法則があつてこそその話だ。極端な話、万有引力の法則は惑星運動の法則の数学的証明による一般化に過ぎない。そして、その際、三次元空間における逆二乗の法則を証明するため、微積分が必要とされ、それが運動の第二法則にも繋がったのだ。

そんなことを考えながら、書架に付けられた名札を探つて、一步一步確実に目標に近づいていく。

その最中だった。

「あら、どうしたの？」

軽い驚きの声が飛び込んできたのは。

視線を向けると彼女はきよとんとした顔をして、アルルクシルを迎えた。

それは良く知る十六の少女だった。

「どうして、貴様がここにいるっ！」

思わず、アルルクシルは叫んでいた。

大声に不愉快なものを感じたのだろう。彼女が体の強い方ではないことは、幼い頃からの付き合いでよく知っている。そのせいも、本の読み過ぎで頭痛になったり、びっくりして卒倒したりすることも多く、騒々しさというものにも耐性がない。その上、図書室という静寂を求められる場での大声だ。知識というものへの侮辱を感じたとしても不思議ではない。思いつき、眉を顰めて、彼女は言った。

「それは私の台詞ではなくて？」

そして、その彼女は——《黒衣の魔女》アルルクシル・アンヤド 鵬翦は——己の敬称ラカブの由来でもある神御

衣《漆黒の法衣》の袖の端を指で掴んでひらひらさせる。その動作に、アルルクシルは少しばかり、落ち着きに取り戻した。彼女はウルルの探士の中でも最高階位の《黒衣》アルルクシル・アンヤド

だ。当然、このような深奥に足を踏み入れることを許可される。しかし、最低階位の
《白 衣》アルムラート・アプヤドであるアル||イクシルは、本来ならいるだけで、厳罰を受ける。鵬翦の疑問
はもつともだろう。

「師匠から、特別のお許しをいただいた。これがその証だ」

そう答えて、アル||イクシルは右手の杖を掲げた。

すると、今度は鵬翦も本気で驚愕した。まじまじとその藜の如き杖を凝視する。

そんな幼馴染の態度にわずかな優越感を覚えたアル||イクシルは、何でもないように言う。

「ちよつと、ナジユマツト・スブフの論文に用があつてね。今、探しているんだ」

すると、鵬翦の身体がピクンと揺れた。そして、杖から目を離して、返答する。

「あら、奇遇ね。それ、あたしが使っているわ」

……その時、己の中で燃えていた炎がすつと風いだのを感じた。

「いや、正確には使っていた……かな。ごめんね、アツザフル語動詞の完了形にはちよつと
まだ戸惑いがあるのよ」鵬翦は流麗なアツザフル正則語で、嫌味を言う。「用事は終わったか
ら、もう、私には必要ないわ」

そして、鵬翦は蛇の如き笑みを浮かべ、ククククと邪な声を漏らす。

そんな彼女にアル||イクシルは小鳥のような怯えを覚えたが、何とか言葉を捻り出した。

「資料にでもするのか？」

「ええ、論文執筆のためのね。この前、言ったでしょう——やり残した事があるって」

妙に明るい声で答えた鵬翦にアル||イクシルはますます不気味なものを覚える。「そ、そう
か」と相槌を打つのが精一杯だった。すると……。

「そうだわ」と、鵬翦は両手を胸の辺りでポンと合わせた「よかったら、この論文の推敲を
お願いできないからしら？ 幼馴染の誼^{えじ}でね」

ここで会ったのも何かの縁^{えじ}でしょう——と、付け加えた彼女の提案にアル||イクシルは、
何故か頷いてしまった。

少女は懐から紙の束を取り出し、少年に渡す。論文には彼女の肌の暖かさが残っていた。

例によって、ドキリとしたものの、とりあえずはその紙面に目を走らせる。

そこには流麗な文字で、数学の論文が綴られていた。

美しいその字を見た時にアル||イクシルは気付くべきだったのかもしれない。鵬翦は字が
荒い。それは彼女をはじめとする生粋の探究士の多くに見られる特徴だった。先のアル||イ
クシルが見せたような爆発的、連鎖的に加速、拡大していく思考に、人間の筆記能力は到底
追いつけない。そのため、脳裏に展開された思考をそのまま紙の上書き写そうとすれば、
当然、荒っぽく醜い字になってしまう。すなわち、この様に歪みの無い文字を鵬翦が書く
ということは……。

「 $\forall \epsilon > 0, \exists \delta \in \mathbb{N} : \forall n > \delta \Rightarrow |a_n - a| < \epsilon \dots$ 任意の正数 ϵ に対し、ある自然数 δ が存在

し、 $n \times B$ ならば $|A_n - A| \leq \epsilon$ となるとき数列 $\{A_n\}$ は A に収束する……。」

……それは既に学会に提出するための清書段階に入っているということなのだ。

カランカランという乾いた音が静寂に満ちた図書室に響く。アルⅡイクシルの手にあつたはずの藜杖が床に倒れ、転がったのだ。

だが、アルⅡイクシルは夢中になって、その論文の頁をめくり続けていた。

「何故だ……」

一気に読み終わった時、アルⅡイクシルの声は憤りに満ち満ちていた。

「……何故、僕にこれを見せたっ……鵬翦っ」

「あら、それを見たら、あなたの参考になるかなと思ってね」

「何が参考だ……!」

少女の余裕に、少年の声も腕が震えていた。後から考えれば、その紙を握り潰したりしなかったことは、少年に残された最後にして、最大の理性だったのだろう。

彼女がやり残した事——それはこの少女自身が発見した微分に欠けていた厳密性の補完だった。そう、それはアルⅡイクシルの考えていたこととまるで同じだった。いや、それだけではない。着想こそ、同じでありながら、その成果は量、質共にアルⅡイクシルの思索をはるかに上回っていた。アルⅡイクシルなどでは、想像も付かなかった深遠な領域を鵬翦は垣間見、莫大な知的財産を引き上げていた。おそらく、これは微積分学における聖書となるだろう。それほどの論文だった。

鵬翦はそれ程のものを既に書き上げていたのだ。彼女がはるか以前から考えていたであろうことに、大幅に遅れて気付いたアルⅡイクシルが舞い上がった間に……

「貴様はっ、貴様はっ、どこまで僕を馬鹿にすれば気が済むんだ!」

「……クククっ、それこそ、馬鹿な台詞じゃなくて?」

嘲る鵬翦にアルⅡイクシルは返す言葉がなかった。ただ、俯いて、沈黙する。わかっている。わかっているのだ。自分がどれほど愚かな真似をしているのかという事は。だが、どうしようもなかった。どうにかするにはあまりにもアルⅡイクシルは未熟で、非才で、そして、無能だった。

「キヤハハハハッ……ねえ、あなたこれからどうするの?」

鵬翦は無邪気に笑い、嫣然と微笑み、そして、酷薄に問いかけた。

指先から、紙の束がぱらぱらと落ちる。

「阿翦………っっ!」

アルⅡイクシルは眼前の黒い衣に手を伸ばした。

「きゅっ」

息は荒くなっていた。鵬翦がまるで少女のような——実際、少女なのだが——声をあげたことも意外ならば、自分がこんな獣のような息遣いをしたことも意外だった。

アルルクシルは鵬翦を押し倒していた。

文字通りの意味である。鵬翦は仰向けに床に倒れており、アルルクシルはその上に押し掛かっていた。押し倒した時の彼女の軽さに、今触れている肢体の柔らかさに、アルルクシルの興奮は高まる。急いで、自分の両手で、彼女の両手を押さえ込む。その手首は細い。日の下に出ないその肌は白い。丹念に梳られたその髪の毛の黒さとは対称的だった。少年の腰が乗っかっている彼女の腰は、今のところ、瘦身の少年と大差がなかった。だが、かすかに触れた胸元には、なるほど少女なのだと思わせる双丘の感触がわずかにあった。

彼女は抵抗しなかった。したとしても、無駄だったろう。指先に触れる手首の細さがその証だった。実のところ、細いとか軽いとかはアルルクシルにも共通するところだったが、取っ組み合いになれば——そこまで、考えて、少女のなんともいえない表情に気付いた。

そして、それは怯えのものではない。

「どうした？」気が付くと、少年は少女に問いかけていた。

「いや、この状況は考えてなかったなあって、思ってたさ」

己の予測が外れたことへの衝撃。ただ、そのみが一大事と言わんばかりの口調。

少女の一言で、少年の動きは止まった。

「どうしたの、アルルクシル・ディアウス？」突然の変化に黒衣の少女はキョトンとし、逆に問いかけた。「迷う必然も躊躇う必要もないはずよ。ここまで接近すれば、言語巫術の介入はありえない。純粋な膂力と体術の勝負になる。あなたでも何とかなるんじゃないからしら？」

鵬翦の言葉に嘘はない。

腕っ節になど欠片も自信がないアルルクシルであるが、それは鵬翦も同じことだ。いや、まだ、アルルクシルの方がいくらか上だろう。いくら、貧弱なアルルクシルとはいえ、たまには野山で遊ぶこともあった。そんな時も常に父の書齋にこもっていた彼女に体力で劣るとは考えられない。男女差も考えれば尚のことだ。体術に関してはいうまでもない。彼女は今まで肉体労働について『下賤』の一言で断じ、軽んじてきた。家庭教師や学校の体育の指導では、一応、真面目に取り組んでいたようだが、その結果はアルルクシルですら、呆れる有り様だった。取っ組み合いになれば、鵬翦はアルルクシルにすら、劣る。

あるいは二人の間に距離があれば、鵬翦は言語巫術で対応できるだろう。鵬翦は巫術の研究及び実践においても、その才能を發揮している。だが、それは言語巫術においての話だ。ここまで、接近していれば、言霊を唱える暇も祝詞を紡ぐ暇もない。この条件では（鵬翦自身は使えないであろう完全無発声式であっても）言語巫術は使えない。それらに頼らない純粋な観念巫術なら、話は別だが、鵬翦は容姿と同じく、干渉力については凡なのだ。言霊や

祝詞に頼らず、観念のみによって、使役できる精霊は質も量も限られる。せいぜい、小さな火花を散らすのが、限界だろう。

だから、鵬翦には打つ手がない。

まして、距離的にアル||イクシルと鵬翦の守護精霊は重複状態にある。命令系統が二重では精霊もまともに働かない。幼き頃、二人で話していたあの理屈通りである。

そう幼き頃——今思えば、二人で森羅万象を語り合っていた幼きあの頃から——いや、そのはるか前、初めて会った時からだ。アル||イクシルならざるディアウスであった時、自分が差し出した懐に一つしかなかった飴玉を奪った時からだ。彼女は常に自分を見下していた。遙かな高みから、自分を見下ろしていたのだ

その彼女を今、自分は組み伏している。

服を剥くのも、肌を舐めるのも、唇を食うのも、処女を奪うのも、アル||イクシルの思いのままだ。

「どうしたの？ほら、この機を逃せば、あなたごときに私ほどの女を抱ける機会なんて、もう二度とないわよ」

虚勢を張るな。その言葉は咽喉で止まった。

クツクツと、黒衣の少女の笑い声が静かな図書館の一室に響いた。

「何がおかしい？」

昏い声、低い声、男の声、獣の声——あらゆる意味で白衣の少年に似つかわしくない声による誰何。

「いや、あなたって、本当に負け犬街道一直線だなんて思ってね」

その言葉が恐怖を芽生えさせた。少女の瞳の奥に映るものに気付かせた。

「ひっ……！」

そこにいたのは哀れな一人の男だった。取るに足らない実を下らない負け犬だった。

若くして、功を成し、名を遂げた少女に対して、身の程知らずの嫉妬と慕情を覚え、叶うわけのない大望を抱いては当然の如く挫折し、すぐに自棄をおこす。卑小な情欲にあっさり屈服し、眼前の少女に惑わされてしまう

それはどうしようもない愚者^{マジヌーン}だった。

言わば、マジヌーン・アル||イクシル・ディアウス。

「どうしたの？」

アル||イクシルは鵬翦から飛び仰け反った。尻餅をついたまま、みっともなく後ずさりした。そのまま、壁の本棚に背をつけては逃げ道を探して、手をカサカサと虫のように動かす醜態をさらした。

「何を脅えているの？」

押し倒されたままの姿勢で、鵬翦は問いかける。

「僕は……僕は……」

「……いずれにせよ、ここまで距離が出来ちゃうと、言語巫術で対応できるわね。神御衣も着込んでいるし」

すつと鵬翦は立ち上がった。そして、その黒衣についた埃を払い、乱れた裾を正す。闇色の髪にも気を使い、その指先で何度か梳った。文句の着けようのない優雅な立ち振る舞いだった。

「惜しかったわね。あと一步で、この先、幾千幾万の星辰を重ねようとも、触れることすら叶わないものが手に入るところだったのに」

その振る舞いを見れば、誰もがあのアブタ^フフェンチェンの如く、この魔女に悩殺されるだろう。

その振る舞いを見れば、誰もがあのアブタ^フフェンチェンの如く、その患者を軽蔑するだろう。

「まあ、あなたはそこいらに転がっている安めの娼婦で満足していなさいな」

そう言って、鵬翦は床に散らばった論文を手で拾い集める。頁がそろっていることを確認すると、その紙の束を再び懐に戻す。それが終わると、思いついたようにアル^フイクシルの傍に寄り、腰を傾け、恋する乙女のようにその耳元に囁く。

「もっとも」いつものように鵬翦はクスクスと笑っていた。「意気地無しの人あなたにはそれもできないかしら？」

ふわりと鼻腔に届く、石鹸の香り。アル^フイクシルは侮辱の言葉よりも、そちらに気をとられ——そして、そんな己に気付いて、拳を握った。立ち上がろうともした。しかし、腰が砕けていた。膝が立たずに、その途中で床に倒れこむ。

余程滑稽だったのだろう。見上げると、鵬翦がクツクツと咽喉を鳴らしていた。

遥かな高みからアル^フイクシルを見下ろしていた。

「それじゃ、ごきげんよう」

そんな言葉を残して、彼女はその場を立ち去った。

その後背は麗しかった。夜を重ねたような髪をたゆたわせ、暝天の黒衣を棚引させる。髪は地に伸び、三つ目の足の如く、衣は天に向かい、八重に別れ、八咫に広がる。その姿は、黒い鳳凰、あるいは大鴉か、いずれにせよ、翼あるものの有り様。《鵬翦^フ》——《鵬翦^オ》^{ヒメ}。翦^{やばね}とは切り揃えられた羽根を表す。その諱の通り、鵬翦には高く空に飛び立つための翼がある。しかし、自分には……。

「ちくしょうっ……!!」

そんなことを考え始めた辺りで、少年は床を殴りつけた。

「ちくしょうっ、ちくしょうっ、ちくしょうっ！」

彼女との別れを意識し始めたあの頃の夜のように、幼な子は泣きじゃくっていた。

働哭は数時間に及んだ。涙は枯れ果てた。

この物語の主人公アルIIアイムア・ムラト・アフヤ白衣の賢者マジュヌーン・アルIIイクシル・ディアウス・イブンIIラフマーンは自らの恋が終わったことを悟った。

「だが、まだだ。……まだ、終わってはいない」

今度こそ、アルIIイクシルはおもむろに立ち上がる。そして、再び、吼えた。

「ああ、そうだ。僕は……俺は弱い男だ。醜い男だ。卑しい男だ。愚かな男だ。しかし……」
激情が無意識に精霊との情報連結を始めたのだろう。神御衣を構成する精霊結晶が筋組織に似た反応をしたのだろう。その背に羽織っていた無垢の白衣は、もう一度、幾対もの翼の如くはためいていた。

「しかし……負けは認めない……、認めないぞ……！俺は……俺は……退しりぞかない……。必ず、必ず、必ず、貴様を……超克して見せるっ！！」

……この時、アルIIイクシルがかくありたいと望んだ臥龍たる男――チーシュイは未だ六歳。遥か東方の夏国にいた。後にアルIIイクシルは気まぐれに彼を奴隸として買うこととなる。その上、アルIIイクシルは一時的にはいえ、鵬雛子の助力を得ることも成功するのだ。このささやかな事件の十数年後、臥龍鳳雛をその両手に収めたアルIIイクシル・ディアウスはその名を歴史に刻むこととなる。

………フウルウ・アルIIピヤオ・アブーIIヌエ著 『白衣春秋』より抜粋。
